

ハニーラビットは、
今日もつかまらない

目次

第一章	ウサギの足は、逃げるために速いんです	5
第二章	ウサギの体は、抱きしめられるために小さいんです	44
第三章	ウサギの耳は、危険を察知するために長いんです	82
第四章	ウサギの毛は、触られるためにふわふわなんです	128
第五章	ウサギの鼻は、甘えるためにひくひくするんです	169
第六章	ウサギのヒゲは、元気をさせるためにぴんとしているんです	218
第七章	ウサギの愛は、蜂蜜のように甘いんです	245

第一章 ウサギの足は、逃げるために速いんです

その昔、旧家の令嬢だったという祖母は、リンゴのウサギを作りながら孫娘に言った。『おとぎ話のお姫様には、何かから逃げている子が多いでしょう？ 幸せになるためには、逃げきらないと駄目よ。おばあちゃんもね、駆け落ちして逃げきったから、とても幸せなのよ』それを聞いた孫娘は、幼心に思った。

幸せのためには、逃げきるだけの脚力をつけねばならないと。
祖母が大好きなウサギのように。



鷹宮^{たかみや}トータルインテリアコーディネート——通称T T I Cのビルは、東京の一角にある。日本屈指の巨大グループ鷹宮ホールディングスが母体の、インテリア業界大手の企業だ。オリジナル家具の開発や販売だけではなく、インテリアのデザイン設計や提案ができる、経験豊かなデザイナーやプランナーが多数在籍している。

そういった最前線かつやで活躍する社員たちが戦いに集中できるのは、総務部の後方支援があるからだ。中でも総務課は雑用係とも言われ、体力と忍耐力が要求される激務な部署であった。

上層部や他部課への連絡、書類を作成する事務補助、接客対応。消耗品や備品などの確認以外にも、トイレが詰まったなどの、機械の調子がおかしいだのといったトラブル対応まで引き受ける。

総務課に所属する社員は現在六名。

その中のひとり、今年二十五歳になる宇佐木月海は、今日も元気に社内を駆け回っている。彼女は大学四年だった三年前、総務での勤務を強く希望して、入社面接を受けた。

『五年前に他界した祖母が、御社の展示会で見つけた非売品のリクライニングチェアを大変気に入らして。祖母を笑顔にさせた御社で、是非働きたいと就職を希望しました。わたしには家具を生み出せるような技術も知識もありませんが、代わりに学生時代、陸上部で鍛えた脚力と体力があります。これらを活用して、インテリア業界で活躍する皆さんの、縁の下の力持ちになりたいんです！』

とはいえ、面接当日はトラブルが発生し、五分ほど集合時間に遅れてしまったのだ。面接は受けられたものの、遅刻などあるまじきこと。落とされるだろうと思っていたが、熱意が伝わったのか、見事内定を獲った。

そして、入社して二年目――

「大変お待たせしました。総務課の宇佐木です」

栗毛色の少し癖っ毛なミディアムヘアの月海は、企画二課のオフィスにいた。明るい笑顔と小柄

な体型が、小動物を思わせる。

企画二課では、大至急が口癖の吉澤課長が、コピー機の前で待ち構えていた。月海は「大至急、動かなくなったコピー機をなんとかして欲しい」と内線で呼び出されてやって来たのだ。

月海が用紙収納トレイを引き出すと、案の定、紙がばんばんに詰められている。紙の量を減らし、奥に詰まっていた紙を取り除く。持参したエアクリナーで細かなゴミを飛ばせば完了。

「ウサちゃんはいつも早くて助かるよ。他の皆は、そば屋の出前だからねえ」

「お褒め頂き光栄です。用紙を少なめにセットすると、紙詰まりしにくくなりますよ」
にこにこ笑顔でアドバイスをする。

「ああ、そうか。いいことを聞いたよ」

毎回、月海は吉澤課長に同じことを言っているのだが、どうも覚えてくれない。

しかし総務の基本は笑顔第一だ。気持ちよく仕事をして貰えるよう、どんな時も笑顔でいなければいけないと、月海は思っている。

彼女が戻ろうとすると課長が引きとめた。

「ついでで悪いけれど、これ五百部ずつコピーをして、六枚ワンセットで郵送して欲しいんだ。これは宛名データ。タックシールに印刷して封筒に貼って。うちの課は皆が忙しくてさ、総務課なら時間がありあまっているだろうから、片手間にできるだろう？」

まだ返事もしていない月海の手に、書類とUSBメモリが入ったクリアファイルが渡される。

「あの……。他部課のお手伝いや、お客様の個人情報が含まれるデータの受け渡しは、部長の承認

がなければいけないので、上を通して頂けると……」

「いやあ、ウサちゃんはイノちゃんみたいに堅苦しいことを言わずに、困っている社員をにこにこと助けてくれるからいいねえ。あ、大至急で頼むよ」

(……いつものことだけれど、まったく聞かずに耳を持ってくれない)

他部課でも上司命令には違いないが、個人の裁量で安易に受けるべきではないのではないか。そう思案していたところ、手からファイルがなくなつた。

「勝手なことをしちや駄目でしょう、吉澤課長」

背の高いスーツ姿の男性が、片手にファイルを持つている。

垂れ目がちな、女性受けしそうな甘い顔立ち。彼は、総務部長の鷺塚千颯だ。

「社内ルールの意味がわからないのなら、総務課で勉強し直します？ 人事に掛け合いますよ」

彼がにこりとして言うと、課長は真つ青な顔で震え上がり、首を横に振る。そしてファイルをひったくるようにして席に戻ってしまった。

企画二課を出て廊下を歩きながら、月海は鷺塚に頭を下げる。

「鷺塚部長、ありがとうございます」

「あの場に居合わせてよかつたよ。きみは人が好すぎるから、ああいう強引な社員には気をつけて。上司相手でも総務部の一員として、社内ルールを徹底させてね」

鷺塚は優しいが、上司としてきちんと注意してくれる。

月海が尊敬する上司のひとりだ。

「はい……。以後、特に気をつけます」

鷺塚は、月海が入社した年に、営業一課の課長から総務部長に昇進した。

エリート街道を進んでいるだけあり、かなりやり手らしい。総務部……特に総務課が、ただの小間使いにならぬよう、社内改革を推し進めたのは彼だという。

「はは。頑張れよ、子ウサギちゃん」

鷺塚は月海のことを子ウサギと呼んでいる。

「はい、頑張ります。この不肖宇佐木、このまま総務課に骨を埋める所存です！」
拳に力を入れてそう言い切ると、鷺塚は声を上げて笑つた。

「あはははは。そんなことはさせないだろうけれどね、あいつが」

「はい？」

「いやいやこちらの話。はは……しかし、目敏いな。ほら、鷹の王様の凱旋だ」

途端に月海は、突き刺さるような視線を肌を感じた。

それは玄関ホールに立つ、長身の男性から向けられている。

黒い前髪から覗く、鷹のそれに似た琥珀色の瞳。

鋭い眼光と共に、まとうオーラは覇者特有の圧を放つ。

(またわたし、睨まれてる！)

月海を震え上がらせたのは、専務の鷹宮榊だった。

彼は、鷹宮グループ会長の孫であり、T T I C社長の次男だ。

鷹塚とは大学時代からの朋友で、ともに今年二十九歳の同期でもある。鷹塚が優しげで甘い美貌ならば、鷹宮はクールで凜とした美貌で、ふたりは女性社員の視線を二分していた。

T T I Cでは、三十歳手前で課長になればその後も出世コース間違いなしとされている。鷹宮も鷹塚も出世コースにあるが、鷹宮が鷹塚よりも早く出世したのは、なにもその血筋だけによるものではない。混迷期だったT T I Cの海外進出を成功させ、利益を拡大させた功績が評価されていることだ。

月海が入社した時から、肩書き・頭脳・美貌と三拍子揃った若き専務には、伝説級の逸話が色々あり、社員の憧れの的だった。しかし、当時の月海にとって鷹宮は、せいぜい月に一度、役員会議でお茶を出す程度の遠い存在。他人事のように噂を聞きながら、仕事を覚えることで精一杯だった。そんなある日、突然鷹宮から呼びとめられたのだ。

一対一での対面は初めてで、鷹宮の迫力に背筋がざわついた。

特にあの琥珀色の瞳で見つめられると、襲われる直前の小動物めいた気分になって怖くなる。

何事かと思っただけで、こちない愛想笑いをしたところ、彼は表情を崩すことなく言った。

『今日は何日だ?』

怯えつつ答えたが、鷹宮はなにか言いたげに目を細めるのみ。本題があるのかと、月海は辛抱強く鷹宮の言葉を待っていたものの、彼は不機嫌そうにため息をついて立ち去った。

それ以降、社員と立ち話をしている最中に鷹宮に遭遇すると、忌々しげに顔を歪められるように

なった。そして、嫌悪を露にした攻撃的な眼差しを向けられるのだ。

公然と睨まれるのはさすがにへこむし、とにかく怖い。だが伝説級の重役に、自分を嫌う理由を直接聞けるほどの度胸もない。月海は、いかに自然に逃げるができるか、方法を模索し始めた。そんな中、鷹宮に関する非情な噂を聞いた。

仕事に厳しい鷹宮は、会社に貢献できない社員を嫌い、容赦なく切り捨てる。特に総務課は、能力的に底辺に見られる社員が多いため、鷹宮から攻撃対象にされているらしいと。

自分は落ちこぼれだから、彼に嫌われているのかもしれない。彼の行動は、俗に言う『肩たたき』というものではないのかと、月海は思ったのだ。

月海は震え上がり、退職に追い込まれてたまるかと、仕事に励み懸命にスキルを磨いた。

しかし入社して二年、『肩たたき』具合はヒートアップしている。月海の恐怖心を煽るような嗜虐的な笑みを向けられたことも、専務室に連れ込まれそうになったこともある。月海の苦手意識は日々募るばかりだが、鷹宮の手からも、退職からも逃げきれていた。今のところは、なんとかか。「凄く睨んでいるな。まったく、僕を睨んでどうするんだよ……」

苦笑交じりの鷹塚の声に、月海は慌てて言った。

「専務と仲がいい部長を睨むはずないじゃないですか。睨まれているのはわたしの方で……」

月海がそう言った瞬間、鷹宮が黒のトレンチコートの裾を翻しながら、こちらに闊歩してきた。まるでランウェイを歩くモデルのように颯爽とした姿を見て、月海は竦み上がる。

(な、なんで来るの? もしかしてどうとう……左遷かクビの勧告!?)

距離を詰めてくる猛禽類は、小動物にとっては脅威だ。生存危機に関わる。

月海が涙目で鷲塚に助けを求めると、彼はにっこりと笑った。

さすがは理解力があるエリート上司……と思っただのは数秒間のこと。彼は助けしてくれるどころか、がしりと月海の腕を掴んで言ったのだ。

「すまないね。僕が賭けに勝ったら、奢ってあげるから。それで許してな」

女性を虜にするキラスマイルを浮かべる。彼は、掴んだ月海の手を持ち上げると、鷹宮に向けてぶんぶん大きく振り、朗らかな声を上げた。

「いやあ、鷹宮専務。出張からお戻りですか？ お疲れ様です！」

(部長、わたしを生餌にして猛禽類を呼ばないでええ！)

「ほら子ウサギちゃん。総務課の一員として専務にご挨拶を」

鷲塚に物申したい気持ちが多々あるものの、その間にも凶悪な目をした猛禽類は、月海との距離を縮めてくる。月海は怯えながらも深く息を吸い、一気に言葉を吐き出した。

「鷹宮専務、お疲れ様です。では部長、急ぎの仕事がありますので、わたしはこれで！」

鷹宮が警戒領域に踏み込んだ瞬間を見計らい——ダッシュ。

短距離で鍛えた月海の足は、T T I C 一番の加速力を誇る。持続性にはいささか欠けるが、特にスタートダッシュはここ二年で飛躍的に向上した。そのフォームは見事なものだ。

鷹宮が到着した時には、鷲塚の手を振りきった月海の姿は見る影もない。

そう、脱兎の如き速さにて、月海は今度も、鷹宮からの逃走に成功したのだ。

月海が総務課に戻ると、課内にいたのは女性課長である猪狩結衣だけだった。

艶やかな長い黒髪を耳にかけると、憂いを帯びた美しい顔をしている。

今年二十九歳になる彼女は、鷹宮と鷲塚の同期だ。三人はともに容姿に優れ、仕事ができエリート街道を突き進んでいることから、『プラチナ同期』と呼ばれている。

月海が席に戻ると、隣に座っている結衣が電話を切り、ため息をついた。

「どこの部課も気軽にD M 発送依頼をしてくるわね。今、別室にいる総務課三人でとりかかっているのは、二課合計七千通分。それ以外の仕事の対応だって大変なのに」

「あ、課長。わたし企画二課の課長にも頼まれて、鷲塚部長に助けて貰いました」

「ふう、上を通せというルールがあっても、無視してくる社員ばかりよね。ページ順に揃えてくれるコレクターとか、紙折り機くらい入れてくれたら、たくさん引き受けられるかもしれないのに。専用機械は高価すぎると、常務から却下されるし」

初老の常務は、若齢で出世している鷲塚を妬ましく思っているとかで、なにかにつけて総務課の稟議に反対する。そんな私情のために総務課も、D M を出したい他の部課も迷惑を被っているのだ。「大量のD M 発送作業をこの人数でするには限界がある。せめてそれ以外の仕事を減らしてくれたら」

結衣が再び盛大にため息をついた時、げっそりとした顔つきの女性社員が戻ってきた。

彼女——月海の先輩社員が請け負ったトラブルは、かなり大変だったようだ。

月海が給湯室に向かい、先輩と結衣の分の珈琲を淹れていると、電話が鳴る。

受話器をとったのは、条件反射的に動いた先輩だったらしい。

月海が珈琲を持って戻った時には、彼女の姿は席になかった。結衣が苦笑交じりに言う。

「パソコンの実地指導に行ったわ。電話対応じゃ埒があかなくなったみたい」

「わたしが代わればよかったですね。戻ってきたばかりでお気の毒です」

冷めないうちに戻れることを願い、月海は先輩の机に珈琲を置いた。

結衣は月海が淹れた珈琲を飲みながら、パソコン作業を始める。電話が鳴らない限りは、月海には急ぎの仕事がない。

先輩たちのDM発送の手伝いをしたいが、総務課から離れば、この先結衣ひとりに電話対応を任せてしまうことになる。それも忍びなく、月海は結衣の事務処理の手伝いを申し出た。

「ありがとう！　じゃ、この書類作成を頼むわ。宇佐木も、少し休憩入れなさいね」

「ご心配ありがとうございます。でもわたし、体力だけありますので！」

カタカタとキーボードを軽やかに叩き始めた月海に、結衣は笑って答える。

「そんなこと言って、宇佐木も戻ってきた時、げっそりとしていたわよ？」

「それは……専務から逃げてきたもので」

「あれ、鷹の王様がイギリスから戻るのって、明後日はずだったけど？」

「そうなんですか？　色々なところを飛び回ってお忙しいはずなのに、どうしていつもぼったり会つちゃうんでしょう。ああやってあからさまに睨まれると、わたしもう本当に怖くて。おかげで

短距離のタイムが、現役の頃より短くなった気がします」

「ふふふ。鷹に狙われた小動物も大変ね。でも、びくびくしている宇佐木をいまだ捕まえられない鷹もどうかと思うわ。いつもは狙った獲物は逃がさない、能がありすぎる鷹のくせに、いつまで爪を隠しておくんだか。本気を出せば、さっと捕獲できそうなものを」

月海は震え上がる。

「恐ろしいことを言わないでくださいよ。大好きだったおばあちゃんが、幸せになるためには逃がされと言うから陸上部で足を鍛えたんです。わたしは幸せのために、逃げきります！」

「心から応援しているわ、私の幸せのためにもね！　私は宇佐木に大金を賭けているんだもの」

途端に月海は、鷲塚からも『賭け』という言葉聞いたことを思い出す。

「賭けているって、もしかして部長とですか？」

「そうよ。鷹との友情をとる鷲とは違って、私は可愛い部下である宇佐木を信じているの。だから私のためにも是非、あの鷹から逃げきってね」

「了解です。課長のためにも、頑張ります！」

賭けの内容はよくわからないながらも力強く月海が断言した時、内線が鳴る。

「はい、総務課の宇佐木です」

すると数秒の間を置いて、声が聞こえた。

『……ひとりで専務室に来い』

そして、ぶつりと切れてしまう。

深みのある透明な声音で、恐喝じみた言葉を吐いたのは――

「逃げきったと思ったら、また専務からお呼び出しがきました」

項垂れて疲れた声を出すと、結衣は気の毒そうな目を向けてくる。

「私も一緒に行こうか？」

「ひとりと言われたので、お気持ちだけで結構です」

「そう？ いいこと、宇佐木。十分以内に総務に戻ってくるのよ」

月海の肩に手を置き、どこか必死に結衣は言う。

「……それも部長との賭けですか？」

「そう。私は、宇佐木の味方よ。とりあえずは……年末までは逃げきって。死に物狂いで」

「はい……」

（課長、わたしでいくつ、部長と賭けをしているんだらう……）

考えながら、月海は重い足を引き摺るようにして専務室に向かった。

専務室は総務課のふたつ上のフロア、ビルの六階にある。

エレベーターから出るとふかふかのワインレッドの絨毯が広がり、重役フロア独特の静謐で重々しい空気が漂う。

あるドアの前で立ち止まった月海は、ノックをして名乗った。

すぐ中に入ると返答があつたため、息を整えてドアを開く。

「失礼します」

東京を一望できる大きな窓の前に、鷹宮が座っていた。

燦々とした日差しを後光のようにまとう、モデル顔負けの端正な顔。

月海を見据える目はいつもの如く鋭い眼光を放ち、威厳に満ちている。

鷹宮の横にある応接ソファには鷲塚が座り、ちょうど女性秘書が珈琲を出していた。

彼女は、志野原寧々といい、月海より二歳年上の専務専属秘書だ。

美貌の男たちにはこやかに対応するが、月海に向ける視線には常に敵意が込められている。

今日も、月海が専務室を訪れたことを快く思っていないのか、キッと睨まれた。

（好きで来ているわけじゃないんだけどな……）

そう言いたいのをぐっと堪えて作り笑いをし、月海は鷹宮に尋ねる。

「ご用はなんでしょうか」

すると鷹宮は超然とした笑みを浮かべ、引き出しから取り出した書類とホチキスを机の上に並べた。

「これは今度の会議で使う資料だ。七部ある。上から五枚ずつホチキスでとめてくれ」

「……承知しました」

（順番通りに書類が揃っているのなら、あとは七回、ホチキスでパチンパチンとするだけなのに、なぜ自分でしないのかしら。電話で呼びつける方が、時間と手間がかかると思うけど）

御曹司の専務さまの考えることはよくわからない。しかし、どんな命令でも従わなければならない

いのが、宮仕えの辛いところだ。月海が書類を受け取ると、寧々が横に立つて鷹宮に言った。

「専務。それくらい私が……」

「いや。きみの手を煩わせることもない。ここはいいから、きみの仕事に戻りなさい」
鷹宮に却下された寧々は渋々と了承し、月海をひと睨みして、退室する。

(そうよね、こんなどうでもいい仕事は、秘書さんの手を煩わせることもないわよね)

そんな仕事を与えられたのは、自分がどうでもいい存在だからだろう。別に大切にされたいわけではないが、あからさまに差別されたようで面白くない。

立ったまま、黙々とホチキスで綴じていくと、鷹宮が妙に慌てた声を出した。

「そんなに急いでやらなくてもいい。そのソファに座ってゆっくりとやってくれ。……鷺塚部長、見ての通り今は仕事だ。また後で来て欲しい」

こんな仕事に、そこまで時間がかかると思えるのだろうか。

馬鹿にされたみたいに思い、月海はますます面白くない。ついホチキスを握る手に力が入る。

「専務。せっかく寧々ちゃんが熱い珈琲を淹れてくれたのに、それを口にししないで去るのは彼女に失礼でしょう。だから珈琲を飲んでからお暇させて頂きます。……ぶっ」

鷺塚は言葉の最後に嘖き出すと、堪えきれないと言わんばかりに肩を揺らして笑う。

(なにがそんなにおかしいんだろう。笑える要素があったかしら)

だが鷹宮は、理由を鷺塚に問いただすこともなく、脅すような強い語調で退室を促した。

「鷺塚。お前はここで無駄な時間を過ごせる暇人じゃないだろう、帰れ」

(そうか、わたしはここで無駄な時間を過ごせる暇人だと思われているってことね)

鷹宮のひと言ひと言に、やけに力チンときてしまう。月海は意地になって、ふたりが会話をしている間に仕事を終わらせた。

「専務、終わりました。部長とごゆっくり」

一礼した月海は迅速に動き、ドアの前で振り返る。すると、鷹宮がなぜか片手の拳を前に突き出した横向きポーズのまま、固まっていた。

(時々見るけれど、あれはなんなのかしら。ガッツポーズでもなさそうだし……。まあいいや)

「失礼しました」

月海がドアノブに手をかけようとした時、鷺塚が笑いを滲ませた声を上げた。

「ちよつと待て。専務がきみを呼び出したのは、別の用事があったからだ」

「え？」

「さあどうぞ専務。僕はお邪魔にならないよう、静かに珈琲を飲んでいきますので」

鷹宮はため息をつくど、背広の内ポケットから小さな包みを取り出し、月海に渡す。

「これは、イギリスの土産だ。いつも世話になっているから」

『世話になっているから』——その言葉が月海の頭の中でリフレインする。

今まで彼から好意を向けられた覚えがないのに、どんな意図があつてのことなのか。

「きみが喜びそうなものを選んできたつもりだ。開けてみてくれ」

いつにない優しい声も、ただ恐怖を煽るもので、月海の警戒心は強まるばかりだった。

「し、仕事をしているだけなので、お気になさらずとも、それならば志野原さんに……」
やんわりと拒絶して速攻で退去したいのに、鷹宮はそれを許さない。

「これはきみのために買ってきたものだ。頼むからこの場で開ける」

お願いなのか命令なのかよくわからぬ語調。どうしてもこの場で見て貰いたいらしい。

嫌な予感を覚えた月海は、鷲塚に目で助けを求め。だが彼はなぜか肩を震わせて笑っており、

「鷹宮に従え」とジエスチャーをしてきた。月海は仕方がなく包みを開ける。

出てきたのは、掌サイズのキーホルダーだ。白くて長い、なにかの動物の尻尾らしきものがついている。

「これは……」

「ラビットフット」

鷹宮は高らかに言う。その単語に、月海は怪訝な顔をした。

(ラビットフット？ 訳したら……ウサギの足だけけど、まさか本物なんてこと……)

すると鷹宮は、月海の疑問を見透かしたかのように、得意顔で言う。

「本物のウサギの後ろ足だ。きみはウサギが好きなのだろう？」

それを聞いて、ラビットフットを載せた月海の掌がふるふると震えた。

(つまり、元は……生きていたウサギなの？ なんて残酷な……)

なにより自分は、愛情を注ぐ動物の屍の一部を貰って喜ぶ死体愛好家に見えるのだろうか。

(それとも、お前の手足もこんな風に簡単にもげるとも言いたいのか？ ただの嫌がらせで、わた

しの反応を見て愉しんでいるのか?)

あまりに残酷なプレゼントだ。とてもじゃないが、ウサギ好きとしては受け取れない。

「……申し訳ないのですが、お気持ちだけで十分です」

「え？」

「わたし……、ウサギは好きですが、ウサギの死体を愛める趣味はなくて……せつかくのプレゼントですが、すみません」

悪趣味だと詰りたい気分をぐっと堪え、やんわりと毒を含ませるので精一杯だ。

月海は包装紙ごと、ラビットフットを鷹宮の手に戻した。すると、色々な負の感情が交錯して、

思わず悔し涙がこぼれてしまう。それを見た鷹宮が目を見開き、驚きの表情を向けてきた。

月海はハツとして慌てて目頭を拭い、ぺこりと頭を下げ、小走りで退室したのだった。



月海が退室してからしばらくして、鷹宮がため息をつきながら専務室に戻ってきた。先程 出た
いった月海を追いかけたのだが、探しても見つからなかったのだ。

鷹宮は鷲塚の向かい側のソファに座ると、むすっとした顔をし、長い足を組む。

「また逃げられたか。だが、榊。今日の子ウサギちゃんの専務室滞在時間は、なんと七分五十二秒。
過去最長だぞ？ これなら十分間の専務室滞在も夢じゃない……ふはっ」

驚塚が堪えきれず笑い出す。しかし鷹宮はそれには無反応で、悩ましげな吐息を漏らした。

「……千颯、お前……俺にアドバイスをくれたよな。彼女はウサギ好きだから、ウサギに関するものでも土産に買ってくれば、きつと態度が緩和するって」

「そうだな」

「これ以上ないってくらいウサギだったろう？　それがなぜ泣かれた？　あれは、嬉し涙じゃないよな……」

解せない腕を組んで考え込む鷹宮に、驚塚は呆れ返ったように言った。

「お前、なぜあれを選んだ？　イギリス発祥の……なんだかラビットとかいう、絵本で有名なウサギとか、アリスに出てくるウサギとか、万人に愛されるものにしておけよ」

「別に他から愛されていなくてもいいんだよ。ラビットフットは幸運のお守りとして有名だろう？　模造品ではない本物だし、ベストなプレゼントだと思ったんだ」

「お守り？　そんなこと初めて聞いた。彼女も、あの様子なら知らないぞ？　意味がわからない奴にとつては、ウサギの死体の一部なんて気味悪いだけだ」

鷹宮は、驚塚の言葉に大いに驚くと、悔しそうに舌打ちをした。

「くそ、俺の選定ミスか。早めに仕切り直しをしないと……」

だが、月海の泣き顔が思い浮かび、いい案が思いつかない。

「それと。総務課ホープの子ウサギちゃんを呼びつけて、あんな仕事はないだろうよ。もっと仕事らしい仕事はなかったのか？」

「今日は……あれしか仕事を作れなかったんだ。忙しく社内を駆け回っている彼女は疲れている。彼女の負担にならないよう、準備をきちんとしたつもりだったんだが……」

「その旁りが彼女に伝わっていればいいけれどさ。せめてもう少し仕事をためてから呼べよ」

「それまで彼女に会わずにいると？　無理だ。仕事を口実にして呼び出さないと、話すこともできないのだから。それでなくともウサギは警戒心が強い。俺は敵ではないのだと、辛抱強く教えてやらないと。そう、辛抱強く……」

「で、お前が辛抱した成果は出ているか？」

「……見ての通りだ」

鷹宮は憂い顔で、嘆息した。それを見て驚塚は苦笑する。

「誰もが畏怖する冷徹な鷹の王様が、いつも捕まえ損ねている子ウサギに恋患いをしているなんてな。しかも入社面接時にひと目惚れとは、泣ける話だね」

「……言ってる」

鷹宮は、昔からさほど苦労せず、なんでもこなしてきた。

女性に関しても、黙っていても傍に寄ってくるため、手に入れる努力をしたことがない。

その時の気分で肌を重ねることもあったが、あくまでそれは一夜限り。

のめり込めるほどの快楽や愛を味わったこともなく、煩わしい現実からの逃避手段として女を利用していたにすぎなかったのだ。社会人となってからは、仕事の方が面白くて、媚びてくる女への興味をさらに失った。

『今、商談より大切なのは、あなたの体です！』

ふと、初めて会った日の月海の言葉を思い出す。

彼女は忘れているだろう。なぜ入社面接に遅れてきたのか。

宇佐木月海には、最初から目を奪われた。

彼女は気弱そうでいて、勝ち気で頑固な面もある。

空気を読むことに長けた危険を察知すればひと跳ねでいなくなる……まさしくウサギ。

なにより彼女は俊足なのだ。捕まえようと伸ばした手は、いつも虚しく宙を切る。彼女が逃走のスタートを切ると、もうお手上げだ。

計算高くて情が薄いと言われやすい自分が、本命相手にはいかに不器用で、諦めの悪い男なのか、初めて知った。

なにせ初めてなのだ。欲しくてたまらないという愛おしさも、自分から攻めるということも。

四歳も年下相手に、まごつく自分に苛立つて立ち去ることしかできなかった昔に比べれば、専務室に呼べるだけ、いくらかましになつてはいる。だがいまだ、上司と部下の関係を崩せない。

頻繁に顔を合わせていれば、なにかしら親近感を持って貰えると考えていた。しかし現実、少しでも長く一緒にいたいと思つているのは自分ばかり。彼女の警戒心は解けない。

せめて彼女の興味を引けるほど気の利いた台詞が出てくればいいものの、早くしないと逃げられると焦るあまりに、口を開くたび裏目に出ている気がする。

今回だつて喜ばせたいとプレゼントを贈つたら、泣かれる始末。距離の詰め方がわからない。

「……千颯が羨ましいよ。怖がられず、笑顔のまままで足を止めて貰えるんだから」

きつと鷺塚からの贈り物なら、彼女は喜んで受け取つただろう。どんなものでも。

そう思うと、ただでさえ切ない心が嫉妬に焦げついてくるようだ。

「僕を睨むな。お前の睨みは怖いんだよ。玄関ホールでも、睨まれているのは自分だと勘違いした子ウサギちゃんが、びびって逃げたじゃないか」

「お前がこれみよがしに、やたら彼女に笑いかけるからだ。それでなくとも、彼女にでれでれして近づくと男が多い。そんな男どもを睨んで牽制しないと、もつていかれるじゃないか」

彼女が皆から好かれるのは、いつも笑顔で気立てがいいからだではないと鷹宮は思っている。

庇護欲をそその愛らしい顔立ちや、こちらの心もぼかぼかと温かくさせてくれるあの雰囲気。もし色香も出るようになったら、いつこの略奪者が彼女に手を伸ばすかわからない。

「だったら、お前が睨んでいるのは彼女ではないことをわかつて貰うために、彼女に笑顔を見せろよ。僕みたいに、にっこりと」

すると鷹宮は遠い目をして、乾いた笑いをこぼす。

「……笑つてみせたら、真っ青になって震え上がり、速攻で逃げられた」

「どんな笑顔を見せたんだ？」

「こんな感じだが……」

鷹宮の作り笑いを見て、鷺塚は首を捻る。

「普通の笑みだよな。それがどうして逃げられる？」

「そんなの、俺が聞きたいよ」

「だったら物言いを優しくしてやれば？ 口下手なりに、誠意というものが伝われば……」

鷹宮は琥珀色の瞳を、鷺塚に向けた。

「話そうと思ってもいないんだよ、相手が」

「だったら電話！ 直通の内線でフレンドリーに話しかけてみる！」

「とうに試してみた。穏やかな口調を心がけ、少しでも警戒心を解くきっかけになるよう、世間話も織り交せて。そして思い切って食事に誘ったら……」

「誘ったら？」

「受話器から聞こえたのは猪狩の笑い声だった。どうやら俺が語りかけていた相手は、早々に凍りついてしまい、不審に思っただけで電話を代わった猪狩が、ずっと聞いていたらしい。そしてひと言」

『キモ！』

「それが胸に突き刺さり、以来、宇佐木を呼び出す電話は、猪狩避けのために端的な言葉のみにするようになった。電話を使えばフレンドリーになれるなど、甘い夢だった」

「……ご愁傷様」

「俺にはなにか足りないのかと考えていたら、後日、猪狩から専務室に本が郵送されてきた。『女心を掴むノウハウ』と『鷹匠が教える百中の鷹狩り』いうタイトルの。わざわざ下の階の総務課から、受取人払いで。本代の請求書も入っただけ。さすがは元秘書課の同期だ」

「……あいつは、お前に秘書課から総務課へ異動させられたことを根に持っているしな。猪狩くら

いだよ、お前にそんなことができる、怖い物知らずの女は」

鷺塚から同情の眼差しを受けながら、鷹宮は淡々と言葉を続けた。

「……せっかくだから読んでみた。だけどさっぱり理解できん。なぜ好きな女を相手に、引くテクニクとやらをとらねばいけないんだ。引いたら、これ幸いと逃げられるだろうが」

「お前は、引く引かない以前の問題だしな。鷹の本はどうだった？」

「あれは中々に興味深かった。鷹を飼ってみたくなったよ」

「お前が飼うのかよ。自分の狩猟スキルを上げるよ！」

鷺塚はツッコミを入れた後、努力が報われない友人に提案をする。

「なあ。一流大学を卒業したわけでも、コネがあるわけでもない子ウサギちゃん、体力と足の速さだけでT I I Cに就職できるはずがない。御曹司が暗躍し、代償を差し出したという事実も知らずに、お前から逃げようとしているんだ。事情を告げれば、状況は変わると思うぞ」

代償——それは、月海を入社させる条件として、鷹宮が社長である父親から求められたものだ。

T I I Cの後継者として正式な名乗りを上げるため、専務に昇進できるだけの成果を短期間で出すこと。当時、営業促進課で課長をしていた鷹宮は、その約束を果たし、海外進出という大プロジェクトを成功させたのだった。

「……言わない。代償の結果がこの地位で、当初の予定通り、お前と猪狩を総務に据えられたんだ。俺も恩恵を受けている。それに俺の私情で勝手にしたこと。そんなことで彼女を縛りたくもないし、彼女は総務課でよくやってきている。彼女が入りたいと願った会社が、いい人材を公平な目で見

抜くいい会社だったと思われたい」

穏やかに笑う鷹宮に、鷲塚は苦笑いを浮かべた。

「生真面目というかストイックというか。鷹の王様は怖いだけじゃく、恋愛には不器用な健気で愛い奴だつて、子ウサギちゃんに教えてやりたいよ」

「余計なことをするなよ。これは俺が自分でなんとかしないとイケないんだから」

「はいはい。僕は今まで通り、傍観者でいさせて貰いますよ。だけど禰。年末までには勝負をつけるよ？ そうじゃなければ僕の財産は、がめついイノシシに根こそぎ持っていかれるんだ」

切実な訴えに、鷹宮はため息をついた。

「今まで順調に人生を歩んできた俺が、同期に賭けの対象にされているとは……」

しかしそんな鷹宮の呟きは鷲塚には届かず、彼は震えるスマホを取り出していた。

「……噂をすればなんとやら、猪狩からメッセージがきた。子ウサギちゃんが十分以内に総務課へ戻つたので、僕の負けだど。今晚も奢り決定だ」

「お前、俺を使って猪狩といくつ賭けをしているんだよ……」

「それは秘密。そうだ、とっておきの情報があったんだ。『ウサギの日』がいつかわかった。三月三日。ミミの日。来週の金曜日だ」

『ウサギの日』——月海の誕生日のことだ。鷹宮はそれがいつなのか探りつつ、今年こそ彼女と過ごすための計画を立てていたが、判明した日付は結衣のヒントから推測した誕生日より大分早かった。

「子ウサギちゃんの誕生日は、既に猪狩が予約している。猪狩を出し抜いて子ウサギちゃんを独占し、今度こそ彼女を喜ばせるんだ。そしてお持ち帰りして、骨まで美味しく頂いちゃまえ！ これはお前の、重大なミッションだ」

すると鷹宮は微妙な顔をした。

「……その日、俺、横浜でパーティーがあるんだが。陵建設の」

「そんなもん後回しにしろよ、僕の財産がかかっているんだぞ。お前の不器用さを、頭の上でカバーしろ。彼女からお前に会いに来る策を考えろ、なんとしても！」

鷲塚の言葉に呼応するように、鷹宮の目が鋭く光る。

鷹宮も、もういい加減にこの状況から抜け出したかった。

怖がらせたわけではなく、自分の前で笑顔になつて欲しいのだ。

「わかった。まずは猪狩をなんとかしよう。猪狩を暴れさせず味方にする方法は……」
策を巡らせる鷹宮は、狩りをする鷹の如く好戦的に笑った。



月海がウサギ好きなのは、亡き父方の祖母がウサギ好きだったからだ。

大正時代に生まれた祖母は、華族の身分を捨て、平民だった祖父と駆け落ちしたらしい。祖母は物腰が上品であったが、平凡に生まれ育った月海の父も月海も、極々普通の一般人である。

母は月海が幼い頃に病死し、彼女が七歳の頃、新たな母ができた。義母は月海よりひとつ年下の義妹を連れて来たが、この母子はプライドが高い支配者タイプで、月海は家に居づらくなり、しばしば祖母のもとに逃げ込んだ。

祖母は月海に優しく、よくリンゴのウサギを作り、泣きじゃくる孫を慰めてくれた。祖母は義母から邪魔者扱いをされても、文句を言わずに質素な暮らしをしていた。その祖母が、笑みをこぼしながら願いを口にしたのはたった一度きり。たまたま月海と見に行ったら、T T I C の展示会にあつたリクライニングチェアに座って、編み物をしてみたいということだった。

だがそのチェアは非売品で、生産予定もなかった。そこで月海がアルバイトをしながら、似たようなチェアを探している間に祖母が急逝。孝行できなかつた月海の心残りは大きく、祖母と縁があつたT T I C で働くことで、せめて思い出の中の祖母を大切にしようとしていた。……それなのに。

(ウサギの足なんて、おばあちゃんが見たら、絶対ショックで心臓発作起こすわ)

平然と、あんな残酷なものを渡そうとしてきた鷹宮。これはもう、嫌がらせの域だ。

しかしあの後、事情を聞いた結衣はひーひーと笑い転げながら、こう言った。

『鷹のセンスが悪いのは確かだけど、それ、有名な幸運のお守りよ?』

初耳だったが、業務後に慌ててネットで検索してみると、結衣の言う通りだった。

「え……本当にウサギの後ろ足を使った、幸運のお守りがあるの?」

古来よりウサギは、繁殖力が高いため神聖視されていたようだ。特にウサギの後ろ足は、走ると

前足よりも前に出て地面を叩くという他の動物には見られない動きをすることから、不思議な力が宿るとされ、ラビットフットは幸運のお守りとなったのだとか。

(そんなものがあるなんて知らなかつた……。もしやわたし、自分の無知さを棚に上げて、純粋な贈りものを拒んで、泣いちゃつたの?)

醜態を曝したことを思い出すと、胃がキリキリする。最悪だったのは自分だ。

次に呼び出された時に、失礼な態度をとつたことを謝ろう。そう考えていた月海だったが、なぜかあれ以降、鷹宮からの呼び出しがない。

体調不良なのかと思いつながら、営業一課に不備の書類を返却した帰り、同じフロアの会議室から出てきたばかりの鷹宮を見かけた。いつも通り悠然としており、特に具合が悪そうな気配はない。

突如、彼の背後に常務が現れ、鷹宮に声をかけた。なにやら激昂しているみたいだ。

月海はひっそりと柱の陰に身を隠した。

「鷹宮専務、勝手をされては困りますよ。総務……特に総務課は私が統括しているんです。会社のためを思っていることを、横から口出ししないでください」

「統括? 会社のため? ほう、それが稟議書を却下している理由だど?」

鷹宮が目を細めて不敵に笑うと、常務は怯んだ様子を見せ、どもりながら答える。

「そ、そうです。衆をしたいために予算を使おうとする、我儘な社員たちを正しく導くのが、上の者の仕事。きちんと組織のルールをわからせねば」

(衆をしたいたための我儘……。総務課がどれだけ大変なのか、わかつていないのね)

すると鷹宮はくつくつと笑った。しかし、その目は笑っていない。

「確かに上に立つ者は、下の者を導く義務がある。ならば常務。あなたの上役として言いましょう。総務は奴隷養成機関ではない。社員の意見も尊重すべきだ。不当な圧力をかけるのはおやめ頂きたい」

聞いている月海の体が跳ねる。まさか鷹宮からそんな言葉が出るとは思わなかったからだ。同時に感動もした。蔑ろにされがちな総務課社員を、鷹宮は認めてくれていたのだと。

「な、なにを根拠に……。そ、そうか、鷲塚部長ですね。彼はT T I Cの伝統を乱そうとしている。それは、T T I Cに長くいる私が窘めねばならないのです。専務が彼と仲がよろしいことは承知しておりますが、私情に目を曇らせるのはいかなものかと……」

「これは社内全体に言えますが、総務を軽視する風潮が伝統だというのなら、それは優先的に改革すべき重要懸案事項。長く続いてきた悪しき因習は、これからのT T I Cに必要な。T T I Cは総務によって支えられている事実を再認識すべきだ。鷲塚部長には公正な監督を命じています。たとえば総務課の予算を、個人で使おうとしている不届き者がいないように」

ぎらりと琥珀色の瞳が光る。すると常務は大仰なほど飛び跳ねた。

「まさか、会社の伝統を守りくださろうとしている常務が、そんなことをしているとは思いますがね。……納得がいかないようでしたら、いつでも専務室にいらしてください。では」

鷹宮は不敵に笑うと、泰然とした態度のまま去っていった。

「……こつちには副社長がいるんだ。すべてが思い通りにできると思うなよ、若造が！」

鷹宮がいなくなった途端に悪態をつく常務。それを眺めながら、月海は思った。

(専務は、総務を馬鹿にしているわけではないの?)

総務は出来損ない集団だから、鷹宮が排除したがっているという噂は、本当ではないのだろうか。会話を聞く限りにおいては、彼は誰よりも総務に理解を示してくれていた。

ここで耳にした彼の言葉が本心であるのなら、鷹宮は、信頼に値する公明正大で温情ある人物だったということになる。月海が今まで彼に抱いていたイメージとは真逆の。

自分は二年も勝手に彼を誤解して、苦手意識を強めてしまっていたのだろうか。そう思うと戸惑いを隠せないが、そう信じてきたのは、彼の一方的な冷たい態度が原因でもある。

どう考えてみても、あの不条理な態度が、公正さと思いやりに満ちたものとは思えない。歩き始めた月海は、しかめっ面をしていたことに気づき、ハッとする。

「いけない。笑顔、笑顔。よくわからない専務のことではなく、金曜日のことを考えてみよう」

四日後の金曜日は、月海の誕生日だ。その日は、仕事帰りに結衣が高級レストランに連れていってくれる。結衣が知る店はどこも洒落ていて、驚くほど美味しい料理ばかり出てくるのだ。

その下調べの犠牲になっていないのが、鷲塚の財布だとは気づいてもいなかったが、月海にとって結衣は真似することのできない都会の華。ああいう大人の女性になりたいと憧れていた。

(まあ、素材からしてまったく違うけれどね)

自虐的に笑う月海は、昔のことまで思い出し、ずうんと沈み込んだ。

高校時代、陸上部に青春を捧げてきた月海だが、つきあった彼氏はいた。ところがある日、彼に

『あまりにも幼すぎて欲情できない』と陰で笑われていることを知ったのだ。そのショックで走行中のバイクに気づかずはねられ、鞆帯を損傷。短距離人生に幕を下ろすことになってしまった。

結果、大学のスポーツ推薦が絶望的になったため、なんとか自力で二流大学に滑り込んだ。そこでやりたいことを探そうと思っていた矢先、バイト先の先輩に押し切られてつきあうことになった。彼は月海に欲情してくれたため、トラウマが薄れかけていたのに、二股が発覚。自分は最初から彼の浮気相手だったと知った。

彼らはふたりとも素敵な容姿の持ち主だったが、所詮イケメンなんて二枚舌。己に釣り合う美女でなければ、本気にならない。よくて中の中あたりの、さして特徴もない童顔女は、もてあそばれ捨てられるのがオチだ。

そう思うからこそ、月海はイケメンという人種を敬遠している。

上司として尊敬する鷲塚だって、プライベートで関わりを持ちたいとは思わない。

特別は望まないから、平凡な男性と普通の恋愛をしてみたい……そう願うけれど、低身長と童顔が祟って、妹的なポジションにされやすいのが現実だ。

「まあ今のわたしは、恋愛より仕事だけだ」

笑いながら総務課に戻ると、誰もいなかった。電話番号もないことを奇妙に感じ、怪訝な顔で席に戻ると、机の上に付箋が貼ってある。『戻ったらDM作業部屋に来て』——結衣の文字だ。なにかあったのだろうか、月海はその部屋に向かった。

部屋には総務課社員が集合し、感動に打ち震えていた。驚いた月海が声をかけると、皆が一斉にその方向を指さす。そこにあつたのは、初めて見る大型機械だ。一体なんの機械なのかわからず首を捻っているうちに、結衣と鷲塚がやって来て、興奮した声を響かせた。

「宇佐木、見てよ！　ようやく総務課念願の機械が入ったの。DM用の高性能の機械が！　紙折り機能もコレクター機能もついて、名刺やタックシールも作れる優れものよ」

「えええ!?　じゃあ常務が、やっと許可してくれたんですか?」

「常務じゃないわ、鷹よ。鷹が強行してくれたの！　借りを作ってしまったわ」

「専務が……」

月海は盗み聞きした鷹宮と常務の会話を思い出す。もしかすると常務は機械納入の件で、鷹宮に噛みついてたのかもしれない。

結衣と同じく、上気した顔で鷲塚が言った。

「総務は旧体質の常務の統括だ。ここだけの話、僕も結構常務に噛みついてきたけれど、総務に新たな風を入れるのは、大変なことなんだよ。きつと常務が越権行為だとあいつを責めるだろうけど、あいつならきつと容易く制圧するだろう。どんなに不可能に思える案件でも、あいつは可能にする。有言実行のあいつには、友ながら感服するよ」

結衣も、珍しく素直に同意する。ふたりの目に宿っているのは純粋な敬意だった。このふたりをここまで魅了できるほど、鷹宮は有能でカリスマ性があるのだ。

月海は、いまだ歓喜に沸き続ける同僚の声を聞きつつ、機械を眺めた。総務課待望のこの機械に

よって、どれだけ時間が短縮され、どれだけ多くのDM発送ができることだろう。

総務の生産性などがはかされているからと却下されていた現場の声を、鷹宮が取り入れてくれただけでも、ありがたいことだった。

『総務は奴隷養成機関ではない。社員の意見も尊重すべきだ』

彼はその言葉を、行動で示してくれた。鷹塚の言う通り、有言実行してくれたのだ。

(やはり、専務は総務課社員の味方になってくれようとしているとしか思えない)

同僚の喜びは、仕事が楽になる機械が入ったからだけではない。自分たちの存在を認めてもらえたことが嬉しいのだ。この会社で自分たちは見捨てられていたわけではない——そんな希望に満ち溢れていた。月海自身もそう感じている。

鷹宮のことを見直した……と言うのはおこがましい気もするが、末端にまで目を向けてくれる彼は、必ずT I Cのトップに立って貰いたい人物だ。彼ならば皆が従うだろう。

(わたし、専務に対して、偏見を持ちすぎていたのかもしれないわ)

彼の眼差しを思い出せば、やはり嫌われているという疑念は拭えないし、苦手意識は簡単に消えるものではない。それを抑えてでも今、感謝の気持ちを伝えたい——

礼を述べに、専務室に行こう。そしてラビットフットのこと、謝りたい。

「あれ、宇佐木、どこか行くの？ これから業者が来て、使い方を説明するんだけど」

「説明は途中参加します。わたし、鷹宮専務のところに行つて来ます」

すると結衣も鷹塚も大仰なほど驚いたが、月海は気にせずその場を離れた。

「総務課の宇佐木です。少々お話があつてお伺いしました。今、よろしいですか？」

ノックをした後にそう言うと、専務室の中からなにかが落ちる音が聞こえた。

まさか鷹宮が倒れたのでは……月海はそんな一抹の不安を覚えたが、三秒後に中に入るようにと返事があつた。

「ええと……どうした？ なにかあつたのか？」

鷹宮は落ち着きのない声を響かせ、机から落ちた電話機を拾っている。

「お忙しいようでしたら、また改めますが……」

「いや、いいんだ。さあ、ソファにでも……」

「いえ、すぐにすみませので、立ったままで結構です」

「すぐにすまさなくてもいいだろう」

「いえいえ。本当にすぐ終わりますので。専務はどうぞお座りください」

「ちょうど立ちたいところだったから俺も立っていよう。で、話とは？」

机に片手をついて、鷹宮は斜め上から月海を見つめてくる。

その眼差しは穏やかで、突然の訪問を怒つてはいないようだ。月海はほつとして言った。

「まずは、先日のラビットフットの件です。わたし、ウサギの足を幸運のお守りにしたものがあるといふことを知らなくて、せっかくのお心遣いを邪推し、専務に失礼な態度をとつてしまい、大変申し訳ありませんでした」

「いや。無料で説明不足だった俺が悪かったんだ。きみを泣かせるなど」
鷹宮が謝つたことに、月海は驚愕すると同時に、申し訳なくなる。

泣かせたということに罪悪感を覚えているのだろう。だからきつと、いつもの怖さが影を潜めているのだ。彼も同じ人間なのだと思うと、警戒心が薄れてくる。

「ただ……他意はなかったことだけは、きみに信じて貰える嬉しい」

その言葉を、今の月海はすんなりと受け止められた。たとえ自分を嫌っているにしても、彼は嫌がらせをするような陰湿で卑怯な男ではないと思うからだ。なぜ贈り物をしてきたのかは依然不明だが、プレゼントしたいと思ってくれたことに對しては否定する気はない。

「勿論です。わたしの誤解のせいで、せっかくのお気持ち踏みにじってしまい、すみませんでした」
「いや、いいんだ。誤解が解けたのならそれで。伝えに来てくれてありがとう」

鷹宮の顔が嬉しそうに綻んだ。それは常の笑みではなく、初めて見る優しい笑みだった。どくりと心臓が跳ねた月海は、こそばゆい空気に居たたまれない心地になる。戸惑う彼女に気づかず、鷹宮は胸ポケットの中にあるウサギの足を取り出すと、月海に渡した。

「ちゃんと幸運の効果があるのは実証済みだ。使ってくれ」

（いや、別に……欲しいわけではないけど）

月海にとつては、残酷な代物には変わりがない。だが、鷹宮はどうしてもプレゼントしたい様子だ。拒絶したことを謝罪している以上、断る理由が見つからない。

「あ、ありがとうございます……」

「そうだ。イギリスから持ち帰った紅茶があるから、飲んでいけ。貰った菓子もある」
小腹が空いていた月海にとつて、魅力的な誘いであった。だが、鷹宮への認識を改めても苦手意識を克服したわけではない。また今の鷹宮は上機嫌らしく穏やかなものの、自分を嫌っている相手だ。それにただの社交辞令だろうと思ひ、月海は断る。

「仕事なので、お気持ちだけ頂戴します。あの、実は……もうひとつお話がありました。このたびは総務課へのDM用の機械導入をご指示頂き、本当にありがとうございます。わたしを含め総務課一同、専務にとっても感謝しております。現場は狂喜乱舞の状態でした」
すると鷹宮は、小さく笑った。

「総務課社員に負担がかかりすぎるのを是とする今の体制は、おかしいと思っている。必ず正していく。きみたちに、もっと心にゆとりをもつて、楽しんで仕事をして貰いたい」
総務課社員にそんな優しい言葉をかけてくれたのは、鷲塚以外では鷹宮だけだ。上滑りの言葉には聞こえない。末端にまで気遣ってくれる素晴らしい上司だと、感動した月海は目を潤ませる。

（上司としてはこんなにいいひとなのに、どうしていつも睨みつけてくるんだろう）
そんなことを思っていた月海に、コホンと咳払いをした鷹宮が言う。

「時間ができた分、よければ、もっとここに来てくれれば……」

（時間に余裕ができるのだから、もっとバリバリと仕事をしろということね。やはり仕事ができる専務には、わたしはのろのろしているように思っていたんだわ）

「はい、専務からのお仕事も、より一層励み、スピーディーに終えるように頑張ります」

熱意のこもった元気のいい返事に、僅かに鷹宮の顔が引き攣った。だが月海はそれに気づかず、笑顔のまままで話を切り上げる。

「ではこれにて失礼します。本当にありがとうございました」
「ちよつと待て！」

鷹宮は慌てたような声を響かせた。既にドアの前に移動していた月海は足を止め、振り返る。彼の手は、またもや不可解に宙へ伸ばされていた。

(本当にあの手はなんだろう。でも聞いちゃいけない気もするし……)

鷹宮からは一向に言葉が出てこない。呼びとめられたと思ったのは勘違いだったのかもしれないと、月海が再度頭を下げてドアノブを回したところ、どこか切実な声が出た。

「待て。こちらからの話は終わっていない」

「なにかご用でもありましたか？」

「……きみには、仕事以外の話はないんだな」

自嘲気味な声が聞こえ、月海は首を捻る。

「ええと……？」

逆に鷹宮へ聞きたい。専務と総務課のヒラ社員が、仕事について以外になにを話すことがあるのかと。

そう思って彼を見た月海は、すぐに出ていかなかったことを後悔する。

「……だったら、仕事の話しようか」

鷹宮がまとう空気が、なぜか鋭いものに変わっていたからだ。

いつも以上に研ぎ澄まされた捕食者の眼差しを向けられ、月海の本能が警鐘を鳴らす。

(え、なんで突然、捕食モードになるの？ どこにそんな要素があった？)

ドアを開けば逃げられるのに、琥珀色の瞳に射竦められて動けない。

鷹宮は腰に片手を当てながら近づいてくる。

(どうして動かないの、わたしの足！)

月海は無意識に、手の中のラビットフットをぎゅうぎゅうと握り潰した。

「……総務課を代表してここを訪れたきみに尋ねよう。その感謝が口だけではないと、どう証明する？ きみの言動は、総務課の総意となるが」

「感謝の証明は、これからの仕事ぶり……」

「だよな？」

にっこりと鷹宮は笑った。月海がぞつとするほど黒い笑みで。

「あ、あの……なにを……」

「実は、今週の金曜日の六時より、陵建設の創立三十周年の記念パーティーが横浜で開かれる。そこに、総務代表として、俺と出席して貰いたい」

その日は月海の誕生日、特別な日だ。楽しみにしていた結衣との誕生会をキャンセルして、自分を嫌う鷹宮と過ごすなど、それだけは回避したい。

「わ、わたし、パーティーなんて行ったことがありませんし、お美しい秘書の方を連れられてはい

かがでしよう。その方が社のイメージ的にもよろしいかと……」

私情を悟られないように、遠回しに拒絶したが、鷹宮は譲らない。

「きみは仕事により一層励むと言っていたが、それは嘘だったのか？ 総務として、仕事放棄はど
う思う？」

切れ長の目が、威嚇するみたいに剣呑に細められる。

「いや、その……。実はその日、大事な予定が入っていました」

「それは俺の言葉より優先すべき、重大なものなのか？」

そう言われてしまえば、自分の誕生日だからという理由は、あまりにも説得力がない自己都合だ。
以前、結衣に自分の名を出していいから逃げ帰れと言われたのを思い出し、口にしてみた。

「じ、実は、猪狩課長と予定が……」

「では猪狩に直接事情を話し、俺から断っておく」

(なぜ引かぬ！)

「わ、わたし……パーティー用のドレスとか、持っていませんし」

「こちらで用意してやる。きみはなにも心配することはない。メイクも髪もプロが仕立ててくれる。
なんといつても、T T I C の総務代表なのだから」

「し、しかし……総務代表となるとわたしの一存では……。まずは直属の上司である猪狩課長にお
伺いを立ててからでないと……」

「ではそれも、俺が直接猪狩に言う。それでいいな？」

「え……」

涙目の月海に、鷹宮はゆったりと笑い、冷たく言い放つ。

「それとも、T T I C の社員として、専務からの命に従えないと？」

常務をものともしなかった圧倒的な力で、月海を押さえつけてくる。

(わたしの誕生日……。猪狩課長とのラブラブデートが……)

「どうなんだ？」

ただ、謝罪と感謝を伝えに來ただけだった。

素晴らしい上司だと感動していたはずだったのに、なぜこんなことになってしまったのだろ
う——月海は泣き出しそうになった。

第二章 ウサギの体は、抱きしめられるために小さいんです

東京都心の一角、総合ブランド『Cendrillon』分店。

ショーウィンドウのマネキンが、斬新なデザインの萌黄色のドレスを着ている。

帰宅途中の月海はそのウィンドウの前で立ち竦み、失望感に満ちた顔つきになった。

「変わったっちゃんだ……」

つい最近まで、マネキンは妖艶な赤いドレスを身にまとっていた。通勤中にそれを眺めるのを楽しんでしていた月海にとつて、あまりにもショックなことだ。

『Cendrillon』とはフランス語でシンデレラの意味で、二十代OLからの圧倒的な支持を誇る日本の高級ブランド。月海は高級ブランドとは無縁に生きてきたが、ある日、たまたま近所にきたばかりの『Cendrillon』の店舗で、マネキンが着ていた赤いドレスにひと目惚れをしてしまったのだ。扇情的な赤色と妖艶なデザインの中に、ブランドイメージである桜があしらわれているバランスが絶妙で、見ているだけで幸せな気分になっていた。

とはいえ、自分に似合うとも思っていないし、気軽に手にできる値段でもない。今だって店内に入って、ウィンドウから消えた赤いドレスの在庫があるなら見せてくれと、店員に言う勇氣もなかった。

所詮、憧れは泡沫の夢。いつかは消えるもの。

なんだか希望が潰えたように、憂鬱な気分がますます強くなってしまふ。

そんなもやもやとした一夜が明け、月海の誕生日となった。

祖母が亡くなってから、月海の誕生日を祝う家族はいない。そのくせ、義母も義妹も自分の誕生日には高価なプレゼントを要求してくる。して貰うことが当然の家族より、朝から「おめでとう」と声をかけ、ちよつとしたプレゼントをくれる会社の同僚の方が、よほど優しく感じられた。

鷹宮からパーティーへの同行を命じられて数日。月海は、結衣が鷹宮に嘸みついてパーティーの同行をやめさせてくれるのを密かに期待していたが、結衣はおとなしく引き下がってしまい、彼女との食事は残念ながら延期となった。

（部長との賭けも一時休戦したというし、どうしたのかしら。念願のDM用の機械導入で、専務への忠誠心を強めちゃったとか？）

時刻はあつという間に四時となり、呼び出しの電話が鳴る。

重い腰を上げて専務室に向かうと、後ろから寧々に呼びとめられた。

「専属秘書でもないのに、どんな手を使って専務とパーティーに行けるようにしたの？」

鷹宮や鷲塚がここにはいないため、わかりやすく般若の如き形相である。

「専務からの業務命令です」

「仕事を利用したの？ なんて小賢しいのかしら」

「別にわたし、パーティーに行きたいわけではありません」

「懇願してもパーティーに連れていって貰えない私を嘲笑っているの？ 底意地悪い女！」

ご立腹の専属秘書には、なにを言っても無駄だった。

「あなたには場違いのパーティーなの、専務に恥をかかせる気!? 二本足のウサギが服を着て出るようなものだわ! 人間なら人間らしく、辞退する謙虚さぐらい見せなさいよ。名実ともに専務のパートナーに相応しいのは、この私なの! 出直して……」

(志野原さんみたいにせかせかしたウサギが、二本足で服を着ていたら、不思議の国のアリスに出てる白ウサギっぽくなるのかしら)

現実逃避している月海が思わず笑みをこぼすと、寧々はさらにいきり立つ。

「どこにやける要素があるの!? そんなに余裕ぶって、あなた何様!」

その時である。深みのある透明な声が背後よりかけられた。

「まだ続くのか? もうそろそろ、宇佐木と出たいのだが」

鷹宮である。声は優しげではあったが苛立ちが明らかで、その目は険しい。

彼の機嫌を察した寧々は飛び上がり、姿勢を正すと頭を垂らした。

「も、申し訳ありません。これはその……」

「宇佐木を連れていくのは俺の指示。それに文句があるということは、俺に異議があるのだと、そう受け取っていいのだな?」

「そ、それは……」

「ならば仕方がない。専務決定に従えないのなら、従える者を専属秘書に……」

「し、失礼しました。出すぎた行為でした。お氣をつけていつてらっしゃいませ!」

……そして月海は、表面上は快く寧々に見送られたのだった。

並んで移動しつつ、鷹宮が言う。

「ホテルの控え室に専門家を呼んでいるから、そこで支度を」

「わかりました」

そこまでして貰って、まるで変化がないことだけは避けたいところだ。

「志野原は秘書としては優秀なのだが、どうも色々と勘違いしているフシがあるな。秘書課に猪狩がいれば、ちゃんと教育してくれたのだろうが」

月海も、結衣は秘書課でもかなり優秀な人材だったと、鷲塚から聞いている。

「あの……部長から、猪狩課長を総務に推挙したのは専務だと聞きました。総務でも課長は非常に有能ですが、そのまま専務の専属秘書になさってもよかったですのでは?」

「それだと、色々不都合が出る。秘書の代わりはいても、猪狩の代わりはいないから」

釈然としない返答だったが、彼にとって結衣は、かけがえない存在らしいことは月海にもわかった。

(だったら、パーティーの同伴は課長の方がよかつたんじゃないや……。なんだろう、もやもやする)

外には黒塗りの車が停まっている。運転手が後部座席のドアを開け、鷹宮を迎えた。

月海は彼を見送ってから公共交通機関でホテルに向かうつもりだ。一緒に乗り込もうとしない月海を訝り、鷹宮が言った。

「どうした、きみも乗れ」

「え、わたしは電車で……」

「同じところに行くんだぞ？ 早く乗れ」

腕を引っばられて無理矢理隣に座らせられると、運転手がドアを閉めた。

そして車が走り出す。

「なんでそんなにドアに張りついている？ もっとこっちに来い」

ぎろりと睨まれ、月海は竦み上がった。

機械の件で鷹宮への評価を改めたといっても、こんな密閉空間で体を寄せ合うなどハイレベルすぎる。

「別に取って食わない。そんなに硬くなるな。俺のパートナーなのだから、俺と同じ車に乗るのは当然だと思って、気楽に座っていてくれ」

「……パートナーと仰られましても、わたしはただの総務代表で……」

月海は少しずつ自然に体を近づける努力はしているもの、まるで怯えたウサギだ。

「それでも、同伴するということはパートナーだ。勿論、きみにとって俺も」

琥珀色の瞳が、微かに切なく揺れる。

「だから今夜はパートナーとして……ただの男性として、見て欲しい。俺もきみにただの女性として接したい。極力、怖がらせないように努める」

異性として見て欲しいと言われたからか、それとも鷹宮の顔が哀しげに見えたからなのか。

……とくり。

月海の心臓が音を立てて揺れた。

彼のパートナーに相応しいのは、もう目にするのができなくなった……『Cendrillon』のあの赤いドレスが似合う女性だ。

たとえば、寧々や結衣のような――

それもあって、自分をなだめるための言葉だとわかっている。だが、あまりに不釣り合いな相手に、しかも勝手に怯えている下端へここまで言ってくれたことに恐縮すると同時に、ありがたく思った。

鷹宮が譲歩しているのだ、腹をくくろう。鷹宮の顔を潰さぬよう、笑顔で頑張ろう。

月海は静かに息を吐くと、にこりと笑った。

「了解しました。過分なるお心遣い、ありがとうございます。数時間ですが、パートナー……全力で務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いします、専務」

すると鷹宮は、複雑そうに微笑んだ。

「こちらこそ、よろしく」

……こうして、一時的にしる、平和協定が結ばれたのだった。

「では二十分後、きみの控え室へ迎えに行く」

鷹宮と別れて月海が入った部屋には、上品そうな女性の美容スタッフがいた。

最後にドレスを着用ということで、先にメイクと髪の設定をするようだ。弾む会話と、手際のいい見事な技術。月海は鏡の中の自分に驚嘆の声を上げた。

「すごい。大人の女性になっています！ お化粧が濃いわけでもないのに、まるで魔法みたいだ。コンプレックスだった童顔が垢抜けた印象に変わっている。

「ふふふ。鷹宮さんから『より自然に、大人っぽく』というオーダーだったんですよ。彼の見立て通り、宇佐木さんは目鼻立ちが整っているのだから、こちらの系統も似合いますね」

（似合うと思ってくれたの？ 専務が？ わたし自身ですら、敬遠していたものを）
実際、プロが完璧な仕事をしているのだから、嫌味ではないのだろう。

（嫌いな相手に、専務はなぜそこまで？ ……そうか、少しでも見栄えのいい相手をエスコートしたいんだわ。うん、そうとしか考えられない）

そう気づくと別人のように綺麗に見えるメイクに、喜んでいいのか嘆いていいのか、複雑だ。その後、スタッフは髪には少しラメを散らせ、癖っ毛を生かしたお洒落なまとめ髪に仕上げられてた。

「さあ、お待ちかねのドレスです。素晴らしいですよ？」

鏡越しに現れたドレス。それは――

「ひっ!？」

月海は反射的に、椅子の上で飛び跳ね、振り返った。

（なぜここにあるの!?)

そこにあるのは――月海が憧れていた、『Cendrillon』の赤いドレスだったのだ。スタッフは嬉々として月海に言った。

「これは『Cendrillon』で人気の、限定ドレスです。きつとお似合いになりますよ」

どうして……似合うなどと思えるのだろう。いい笑いものになるだけだ。

（わたしひとりの問題じゃない。専務だって笑われてしまうのに!)

「無理……です。わたし、このドレスは着られません。似合いません」

月海は完全に臆していた。

大好きなドレスだし、再会できたのは嬉しい。しかし、これを着るとなると話は別なのだ。

こんなアダルトなデザインが似合うのは、肉食系の華やかな美人だろう。いくら大人メイクをして貰っていても、色気とは無縁な女には、ちぐはぐさが目立って滑稽なだけだ。

「宇佐木さんは華奢なのにDカップもあってスタイルがいいし、お似合いになりますよ」

さすがはプロ。胸の大きさを言い当ててきた。

「彼の見立ては素晴らしいと思いますわ。さすがは恋人さん」

最後に爆弾発言を投げられ、月海は悲鳴のような声を上げて訂正する。

「恋人じゃなくて、上司です！ わたしはただの付添いです」

「あら、私はずきり……。でしたら、恋人でもないのにこんなにも宇佐木さんのことを考え、似合うものを選び、バッグも靴もすべて揃えてくれるなんて、とても素晴らしい上司ですわね」

（確かに、好きなものを用意してくれた、素晴らしい上司だけど）